

行政視察報告書

委員会名(会派名)	市民厚生常任委員会	報告者	大島靖浩・高橋妙子
視察日程	令和7年10月6日(月)～8日(水)		
調査事項及び視察地	① 福島県福島市 子どものえがお条例の取組について		
	② 福島県福島市 子どもの夢を育む施設 こむこむ館について		
	③ 福島県立医科大学 東日本大震災以降の子どもの心のケアについて		
	④ 福島県伊達市 健幸都市づくりの取組について		
	⑤ 福島県西白河郡矢吹町(矢吹町複合施設 KOKOTTO) 家庭訪問型子育て支援「ホームスタート事業」について		
参加議員(委員)	中山眞二、渡邊雄三、小林由明、長井由喜雄、タナカ・キン、大島靖浩、高橋妙子		
①	<p>【調査目的・内容】 子どもたちが福島市で育って良かったと誇りを持ち、子育てするなら福島市と称されるよう、地域社会全体で子どもと子育てを応援し、子どもの笑顔あふれる社会を実現することを目的とし制定された「子どものえがお条例」の取り組みを学び、子育てするなら燕市を掲げる本市において活かしていくため。</p> <p>【所感】 条例制定において、福島市が大震災や感染症の影響を乗り越え、持続的に発展していくためには、「子育てするなら福島市」と称されるまちになり、若い世代が集まり定着していくことが大切であるという背景がある。</p> <p>「子育てするなら燕市で」を掲げる本市においても、持続的なまちづくり、若い世代が集まり定着してもらうことを目的とする背景は同じであり、地域全体が子どもたちを大切にし、子育て世代を応援する仕組みをつくる重要性を認識し取り組む体制は、子育て施策の基本的な方向性として多いに共感できた。</p> <p>条例の概要として、地域の人、地域の事業者、保育園・幼稚園・学校など、保護者、子ども、市と6つの役割があり、それぞれの可能性を發揮しながら、関係性を保ち、繋がり、「子育てするなら福島市」の目指すべき子育ての在り方を追求し取り組んでいる。</p> <p>少子高齢化が進む現代において、地域全体で子どもを見守り、育てていく取り組みや各コミュニティが持つ能力と可能性が持続的であることは、子育て施策のみならず、まちづくりの発展にも繋がると考える。</p>		
	②	<p>【調査目的・内容】 子どもたちが「楽しみながら学べる」ことをテーマにした教育文化複合施設である、「子どもの夢を育む施設こむこむ館」は、福島駅から徒歩数分の便利な場所にあるが、駐車場問題などの課題も抱えている。子どもたちの遊びと学びの場所だけではなく、「子どもの居場所」としてどう取り組まれているか学び、今後の燕市の子どもを取り巻く諸課題に活かしていくため。</p>	

【所感】

近年、気象の過酷化や犯罪への警戒等から、安全・安心な子どもの居場所、特に屋内遊び場へのニーズが高まっており、特に中心部においては、駅周辺のまちづくりに関する議論などでも、中核的な遊び場が強く求められているため、「福島市子どもの夢を育む施設こむこむ館」はこれまでの学びの機能に加えて、市内外から子どもが集まる拠点的な居場所・遊び場として、全面的にリニューアルするとのことであるが、まちづくりや子どもの居場所の観点から学ばせていただく目的で視察をした。

施設活動の目標として、子どもの夢を育むことと、中心市街地の活性化が挙げられている。様々なワークショップや企画展、イベントを行い、多様な世代のコミュニケーション拠点としての役割を果たしているだけではなく、館内にはプラネタリウムもあり、入館者数はR5年で20万人を超えている。

リニューアルに向けたワークショップでは、様々な意見や要望をいただき、特に要望の強かった意見やアイデアについては、今後、民間事業者へのサウンディング調査にて、実現可能性の聞き取りなどを行い、市民の声や民間事業者からの新たな提案などを盛り込んだリニューアル基本計画を策定していく予定となっているとのことである。

少子高齢化や、子どもたちの遊び方、休日の過ごし方等も変化していく中で、こむこむ館の可能性を大いに発揮していただきたいと思いますと同時に、燕市においても、子どものみならず、様々な世代の方が共に楽しめる「居場所づくり」の取り組みが必要となってくると考える。こむこむ館で学ばせていただいたことをしっかりと、今後の活動に活かしていきたい。

【調査目的・内容】

福島県における「県民健康調査：ここから調査」の目的である、被災県民のメンタルヘルス生活習慣問題を長期的に把握し、その情報から一人ひとりに寄り添った保健・医療・福祉に係る適切な支援を実施している状況を視察し、仮に、本市において柏崎刈羽原子力発電所の被災事故が発生した際に、その対処の一助となる研究及び実践を学び、燕市（以下「本市」という。）での事故及び事後対策に反映させる。

【所感】**【所感】**

1 先方参加者

- (1) 安村誠司センター長
- (2) 堀越直子こころの健康度・生活習慣調査支援室副室長
- (3) 及川祐一支援室助手
- (4) 菊池浩旦支援室
- (5) 大山一浩健康調査課副課長
- (6) 松本勉健康調査課員

2 内容

安村センター長の挨拶の後、堀越副室長及び及川助手からパワーポイントを用いた福島県「県民健康調査：ここから調査」に係る概要、調査研究結果から見てきたこと、及びアウトリーチ型電話支援等についての説明があった。

3 質疑応答

本職から被災した子どもらの精神状況におけるトラウマに対する県の対応振りについて質問したところ、専門機関につなげるとの回答振りであった。

4 所感

本職が前職である法務省関東医療少年院の勤務において、当時の医務課長から3.11以降の福島県内の子どもの心のケアに取り組んだ結果について話を伺った経験が、今回の視察先の選定のきっかけとなった。氏の弁によれば、「福島の子供達はおとなしく、本来は親・兄弟を亡くしたり、家を失った等の強度の不安にあっても、辛いはずの内面を表出することなく、周囲に迷惑をかけることを嫌がり、誰にも内面を吐露しない。よって、支援者の支援が入りにくい。」とのことであった。

本日の説明においても、子どもの情緒と行動（SDQ）ハイリスク割合の推移からも、平成23年において全国平均が9.5%であるにもかかわらず、4歳から6歳が24.4%、小学生が22.0%、中学生が16.2%であり強度の情緒の不安定さがうかがえた（現在は全国平均との差はない）。また、育児に自信がある母親に比べ、自信がない母親の子どものメンタルヘルスのリスクは2.8倍と有意に高かった。等上述のデータ結果は元医務課長の発言を裏付けるものであった。

よって、今回の視察を通じて、被災体験だけでなく、日常生活においても子どもにとって強度の不安体験や母親の育児に対する自信のなさは、友人知人や家族等の周囲の積極的な介入が必要であり、それらの介入を受けられない者には行政が介入することが重要であることが理解できた。

本市においてもすでに、アウトリーチ型の介入を実施していると思われるところ、更に積極的に推進するためには、職員の人材育成と配置人員の確保及び財政的裏付けが必要となることが、次期課題となるものと思料する。

【調査目的・内容】

「健幸都市」を目指し、誰でも気軽に身体を動かす環境を整え、元気な人を増やす取り組みとして、平成26年度より「元気づくりシステム」を導入。市民一人一人の「自分のための取組」という主体性を大事に、行政側の課題としてだけではなく市民の健康課題と捉え、市民と一緒に課題解決に取り組んでいる健幸都市づくりの取り組みを学び、燕市の健康づくりマイストーリー運動の今後の展開に活かしていくため。

【所感】

少子高齢化への対応として、元気な高齢者を増やす施策で社会を支えることが重要であり、そのためには、健康福祉だけではなく、市として健幸施策の展開が必要であることから、健幸都市の取り組みを推進している。

健康づくり無関心層も含めて、多数の住民の行動変容を促すインセンティブ制度としており、また、福島県の「ふくしま健民パスポート事業」と連携して展開している「だてな健幸ポイント事業」は、R7年3月時点において、3,747人が参加している。

④

働き盛り世代の健康づくりにおいては、事業所等と連携して実施しており、エアロバイク、体重計、血圧計を無料で貸し出し（6ヶ月・更新可）、従業員が運動を始めるきっかけや自分自身の体の状態を知る機会の提供として役立っている。

市内5カ所で実施する通所型の運動事業で、40歳以上の市民を対象にした、健幸クラブFineにおいては、介護予防、フレイル予防、運動習慣化と3つのコースに分かれており、その特徴として、健康運動指導士が運動指導を行っていること、タイプが違う教室を自由に選び参加出来る。

取り組みの効果として、市民の健康意識の高まりが見て取れることから、今後も引き続き継続していかなければいけない取り組みとのことであった。

健康であることは誰もが願うことであり、健康でいることは家族、地域を支える力にもなると考える。健康への意識の啓発だけではなく、燕市においても、伊達市の取り組みで学んだことを活かしていきたいと考えている。

【調査目的・内容】

「ホームスタート」は、1973年にイギリスで始まった家庭訪問型子育て支援で、世界の22の国や地域で実施され、日本でも100の市町村で実施されている。矢吹町でも、子育て経験があり、研修を受けたホームビジターが家庭を訪問し、家事や育児と一緒にするなど子育てサポートしている。

矢吹町複合施設KOKOTTO（ココット）内、未来くるステーションにおいての子育て支援の一環としてホームスタートがされていることから、矢吹町複合施設ココットの見学と同時にホームスタート事業を学ばせていただき、新たな視点で子育て支援について考え、活かしていくため視察に伺った。

【所感】

妊娠期から未就学児の子どもがいる家庭を対象としており、子育てに対する悩みを聴き、家事や育児と一緒にしたり出かけたりすることで子育てを応援していく事業である。利用に関しては無料であり、訪問は週に1回、2時間程度・4回訪問が基本となっている。

⑤ 基本的に訪問するのは研修を受けた信頼できる地域の子育て経験者だが、利用者とホームビジターの調整役としてオーガナイザーがいる。ホームビジターと利用者の関係性、相性などもあることから、調整役としてのオーガナイザーの役割は重要と考える。

ホームビジターになるには研修が必要であり、持続的にビジターとして活動をしてくれるボランティアの確保維持が課題となっている。

また、矢吹町複合施設ココットは、令和2年にオープンし、公民館機能、図書館機能、子育て世代活動支援機能、観光交流機能を複合化した施設であり、中心市街地に新たな賑わいを創出し、生涯学習の拠点となっている。

複合施設ココットにおいて、子育て支援をうけることができ、図書館も利用できること、各スペースを交流の場として使用できることは子育て世代のみならず、全ての住民にとって、人と繋がる大切さ、コミュニティの形成の観点からみても重要だと考える。

燕市の子育て支援において、学んだことを活かしていきたい。

【視察の様子】

① 福島県福島市



② 子どもの夢を育む施設 こむこむ館



③ 福島県立医科大学



【視察の様子】

④ 福島県伊達市



⑤ 福島県西白河郡矢吹町（矢吹町複合施設ココット）

